演題番号：B3

和牛繁殖農家における子牛の飼養管理、疾病発生及び出荷成績の比較分析

○岩田幸義

京都府丹後家保

1. はじめに：和牛繁殖農家にとって子牛の死亡は大きな課題の一つである。令和3年の全国子牛死廃事故原因を見ると、新生子異常、消化器病、循環器病、呼吸器病の順に多い。分娩に起因する新生子異常は分娩前後の観察と適切な対応によって、消化器病と呼吸器病は飼養管理によって一定予防可能。京都府丹後家保では家畜防疫、家畜保健衛生、生産性向上支援等の家畜保健衛生所の基本業務に加え、家畜診療も行っている。当所業務で得たデータをもとに地域の和牛繁殖農家の管理方法の差が疾病発生や出荷成績に及ぼす影響について調査を行った。

2. 材料及び方法：地域の和牛繁殖農家のうち、飼養繁殖雌牛が10頭以上おり、当所が診療を行い、子牛せり市へ出荷がある５農家（Ａ～Ｅ）を対象とし、分娩前後の飼養管理、子牛の診療履歴、分娩事故率、子牛せり市での出荷成績を比較した。

3. 結果：農家毎の分娩前後の管理方法をみると、母牛の分娩前分娩房入房期間と分娩後分娩房内母子同居期間を合わせた分娩房占有期間は、Ａ，Ｂ農家が３か月、Ｃ，Ｄ農家が１か月前後であった。Ｅ農家は分娩後即母子完全分離し、完全人工哺乳で飼育。分娩事故率はＣ農家が他４農家の５倍以上高い結果。平均診療日数はＢ，Ｃ農家が10日前後と多く、Ａ，Ｄ，Ｅ農家は３日以下と少ない傾向。特にＣ農家は他４農家と比較して顕著に肺炎の診療頭数及び診療日数が多くなった。せり市成績を見ると、平均価格は診療日数最小のＡ農家で一番高く、診療日数は多いが管理が手厚いＢ農家が次いで高くなった。

4. 考察および結語：分娩房占有期間の長いＡ農家とＢ農家で分娩事故が少なく、せり市価格が高い傾向。Ｂ農家は診療日数多いが、他農家と比較して早期に診療依頼がある印象。これらのことから分娩前後に個別飼養し、母子の管理が手厚い農家で分娩事故が少なく、母牛の状態も安定し、子牛のストレスも少なく、丈夫で損耗の少ない子牛生産ができていると考えた。また、子牛の観察頻度が多く、早期発見早期治療を行うことで疾病が重篤化せず、出荷成績への影響が少ないものと推察。分娩事故率の高いＣ農家は分娩房占有期間が短い上、飼養頭数に対し分娩房数が少なく、分娩前後の環境の安定や観察が不十分なことが示唆された。今後は今回のデータをもとに改善案を提示し、分娩前後の適正な飼養管理指導に努め、地域の和牛繁殖農家の生産性向上を目指したい。